Osaka University Knowledge Archive

Title	対話がつづくことと対話からそれること
Author(s)	紀平, 知樹
Citation	臨床哲学のメチエ. 2006, 15, p. 17-18
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/5696
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

対話が続くことと対話からそれること

紀平　知樹

洛星高校での哲学の授業も何とか二年目を終えることができた。一年目は、私はもっぱら授業のコーディネーターとして関わっており、実際に授業を行うことはしなかったが、二年目の今年は、コーディネーターとしても関わりながら、前期に（洛星高校は前期、後期制）授業も行ったので、コーディネーターとしての感想と実際に授業を行った上での感想を書いてみたいと思う。

一年目にコーディネーターとして関わってみて（あるいは臨床哲学研究室で洛星高校の前に取り組んでいた大阪府立福井高校での取り組みを見ていて）、強く感じたことは、講師が毎回のように変わる授業では、コーディネーターがかなり強く授業のテーマや連続性を意識しておかねばならないのではないか、ということである。一年目も、二年目も、各回の授業では、生徒達のほうから活発に意見も出され、各回の授業は、それぞれうまくいっていたように思われる。しかしでは、前期、後期、あるいは一年間を通したパッケージとしてこの二年間の授業がうまくいっていたかと問うなら、各回の授業のように、すぐさまポジティブに答えることは難しい。

この難しさの原因の一つには、やはり「哲学とは何か？」という問題が潜んでいるように思われる。いったい、哲学を教えるというときに、何を教えればいいのか。これに対していまだ明確な答えを持ち合わせてはいないが、今年の授業に関していうなら、「哲学を教える」ということではなく、「哲学をする」ということ、それをひとまず対話という形式において行ってもらうということを授業の目標にしていた。

私が担当した回は、環境問題をテーマに授業を行った。一回目の授業では、「動物と人間との違い」ということを考えてもらうために、「なぜ人間は他のものの命を奪うのか」という問いをもとにしてソクラテスの対話ゲームを、行ってもらうことにした（この授業についての報告は高橋さんによって報告されている）。

この対話ゲームでは、三人でひとつのグループを作り、一人はソクラテス役、もう一人はソクラテスの対話相手役、そして三人目は記録役（プラトン）という設定で、ひとつの問いをめぐって対話を作ってもらうというものだ。まず上記の問いに対して、６つの答えを用意し、そのうちからひとつを選んで、対話をすすめてもらった。実際に授業をする前に、自分で対話を作ってみたが、問い方、答え方によっては対話がすぐに終わってしまい、なかなか難しいという感想を持っていて、授業で生徒たちがどれくらい対話を続け

られるか少し心配に感じたのだが、実際にしてもらったところどのグループもそれなりに対話を続けられており、心配は取り越し苦労だったようだ。

しかし、どのグループにも共通して感じたことは、対話における発言のひとつひとつ（問う側の発言も、答える側の発言も）がどうしても長くなってしまうということであった。長くなる原因は、たぶん、一度にすべての解答を与えようとしていることではないかと思う。そのためには発言に様々な条件を付与しなければならず、そのために発言が長くなり、またそのような条件を付け足すことによって、問いの核心的なところからすこしずつ遠ざかってしまうきっかけを作ってしまうのではないかと思われた。

第二回目の授業では、本来なら、前回作った対話をもとにして、さらに動物と人間との相違についての議論を深めていくべきであったかもしれないが、一回目からほぼ一ヶ月時間があいてしまったこともあり、すこしテーマを変えて環境について考えてもらうことにした。この回は、１０分の短編映画１５本からなる「１０ミニッツ・オールダー」という映画の中から、「失われた一万年」という短編映画を観てもらい、その後で対話を行ってもらうことにした。

この「失われた一万年」という映画は、アマゾンの未開民族がはじめて現代文明と遭遇したときの様子と、それから２０年ほどたった後に再び取材に訪れて彼らの生活がどのように変化したのかということ録画したドキュメンタリー映画であった。この映画を観たうえで、私が生徒のみんなに考えてもらいたかったことは、人間にとっての文化の意味であった。結果からいえば、この第二回目の授業はあまりうまくいかなかったように思う。ひとつの原因として、私が提出した「人間にとって文化にはどのような意味があるか？」という問いが少し抽象的にすぎたのではないかということである。また、対話の進行という点でも、うまくできていなかったというのが二つの目の原因のように思われる。

今年度の最後の授業時に、一年間を振り返って、この授業では対話が成立していたかということをみんなで議論したが、その時に出された意見として私の第二回目の授業では、話が脱線しすぎていて対話として成立していなかったという意見があった。

映画を観終わった後の対話の中で、文化をブラックボックスにたとえる発言が出され、そのブラックボックスの意味についての議論に話が偏りすぎて、最初の問いを置き去りにしてしまったという感は確かに否めない。

しかし逆に、対話とは偶然的なもので予め決められた手順を踏んで進んでいくことだけがいいわけでもないように思う。今回はこちらの余裕のなさから、偶然性に身を委ねすぎてしまったかなと反省しています。

（きひらともき）